



発掘 文学の宝



荅北町にゆかりのある文学を発掘し、紹介するこのコラムも第7回目となりました。今回は、大正時代の統計学者で日本発の『財政総覧』を刊行した細川雄二郎（富岡出身、没後110年）の娘であり、童話作家の「細川武子」をご紹介します。

企画 ドットワークス 下川嘉奈

細川武子

1892年6月16日 - 1956年9月28日
東京都生まれ

教育者、童話作家。調布高等女学校副校長、立華学園長などを務め、日本の女子教育に尽力の傍ら多くの童話を残す。著書『女子学生』は映画化もされている。



写真提供：学校法人調布学園

児童文学者で 女学校経営の教育者

平井 建治

細川武子の出自は、天草郡富岡町2丁目上町。天領期の郡内庄屋定宿・讃岐屋である。場所は、地役人役宅、肥後藩在番小屋の東隣、今の富岡小学校裏手。三丁目東海岸に別荘を構えていた。慶応4年、別荘で仮寓中の福岡藩士・石

蔵卯平が、幕府の刺客に殺害された。卯平は高杉晋作の同志、武子の父・雄二郎が憂国の情から匿っていた。その後、雄二郎は、上京して大著『日本財政総覧』を刊行。別荘は、松本久太郎別荘の時、「五足の靴」一行が投宿している。

武子は、雄二郎の嗣子として、明治25年、東京府芝区佐久間町で生まれた。同45年、東京府女子師範学校卒業。後に、調布女学校、立華女学校を創立して校長となった。さらに、女流作家として、島崎藤村、濱田廣介に師事。藤村が発刊した婦人雑誌『処女地』に寄稿した。（濱田は山形県の童話作家で「日本のアンデルセン」とも呼ばれ、日本の児童文学の先駆者。日本児童文学協会初代理事長。）武子は、芸家協会初代理事長。武子は、東京放送童話研究会、日本童話作家協会に所属。昭和16年・有光社『女学生記』、同18年・同『父と母と子』、同23年・講談社『乙女の國』刊行。他に、『むすめ達』、『童話集』、『堤中納言物語』、『お話おばあさん』、『巨いなる母』、『ラジオの主婦日記』など。

そして、『女学生記』の「まえがき」で、「女子教育は家庭の妻や母だけの養成に偏重され、男子教育の従属的にされている。人間形成上、子の良き教育者として、社会的な尊厳から、女子教育を行わなければならない」と発刊理由を説いた。

明治期、児童文学が形成されると、少年から分化して「少女」という読者カテゴリーが誕生した。大正期にかけて、『少女雑誌』の『少女界』、『少女画報』、『少女倶楽部』など数多く刊行。『少女世界』は、発行部数が20万部に迫った。それは、劇的な識字率の向上、図書館の開設、マスメディアの発達によるものであった。特に、都会の中産階級では、爆発的に読者層が増大した。とはいえ、女子教育の最高・最終学府は、女学校と師範学校までとされ、あくまでも男が基準とされる閉鎖的な社会であった。少女雑誌も、良妻賢母や忠君愛国ものが溢れ、武子の女子教育の理想と相容れるものではなかった。それでも、武子は自らが経営する

女学校の生徒たちと、寝食を共にして、女子に対しての感受性が敏感であった。第2次世界大戦後、少女雑誌は自由な誌面作りに変容し、総合雑誌として、小説・芸能記事・お洒落などの読み物、漫画が多く掲載された。武子は、多くの要職を抱える傍ら著述、講演、放送などの文化事業に尽瘁して、昭和31年に没した。享年64歳。筆者は、武子直筆の原稿8枚、著作5冊を大切に所蔵している。



『細川武子童話集』

現存する本は希少ですが、国立国会図書館のアーカイブ本をウェブ上で無料で読むことができます。当時の日本人の暮らしが見える短編集です。

